

Parallel Chance

モクロック

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

西暦2620年

アネックス1号は乗組員150名を乗せ火星へと向かつた。

荒野で進化を遂げた害虫の王「テラフォーマー」

暗躍する裏切り者

襲い来る脅威に人々は立ち向かう。

これは人の誇りをかけた闘いの物語。

※不定更新であり進行はかなり遅いです。

目

次

第1話	抑止力	1
第2話	海漂林の猛者	6
第3話	希望を	12
第4話	水面下で	18
第5話	向かう心	27
登場人物話	L y r a (ライラ) 輝く下	39
で		49
第6話	遭遇	62
第7話	始動	75
第8話	爬道	85
第9話	誓い	93
第10話	染まる色	

第11話 常闇より
登場人物話 屠り復讐を誓う

第1話 抑止力

「これは……ハズレを引いたか？」

第6班は窮地に陥っていた。

「う……嘘だろ、何で……」

「しかもゴキブリが……」

荒涼としていた火星に放たれ、急激な進化を果たした存在 テラフォーマー

それが今、この星の脅威として人に襲いかかろうとしていた。

(このまま計画通りに行うか……)

班員が震え怯える中、人類の到達点＜ジョセフ＞は冷酷な判断を下そうとしていた。

「まだ慌てる時間じゃない、ジョセフ君や」

何者かがジョセフの肩に手をかけた。

ジョセフが振り返るとそこには一人の老人がいた。

左腕が義手の老人の口には電子タバコが：否、火星における人類の切り札が咥えられていた。

「さて、久々に暴れるかな」

U—NASA本部

その中でも極一部の人間しか入ることのできない部屋、その中で極秘の会合が行われていた。

「今日はお集まりいただきありがとうございます。」

髭を生やした男、〈小町小吉〉が礼をした。

周囲を見渡せば小吉を囲むように7人の人物が席に着いている。しかしそれの人物は逞しい男から老人、か弱そうな女、性別が判断できない者など一見すると共通点がないように思えた。

「今回お集まり頂いたのは他でもない、アネックスにおける抑止力についてです。」

「おつと失敬、ジョセフ班長。老人のお節介だとは思うが、ちよつくりこの状況を変えてもいいかのお？」

「ああ……どうぞ？」

「それじゃあ…

”薬”の配布後、

マルシアさんは専用武器を使用し遠くのテラフォーマーの狙撃を
トラウト君、ザントガ君、他戦闘要員は非戦闘員の護衛を
ジョセフ班長、わしとでテラ^やフォーマー^らーをぶつ叩く!!」

班員それぞれが切り札である”薬”を手にし、摂取する。

すると彼らの姿が急激に変化していく。

あるものは鱗を、あるものは羽毛を、あるものは毛皮を、そしてあるものは……

「フンッ！」

蟹のような甲殻を発現させていた。

「フウー……若返った気分だな」

老人だつた男は蟹のような甲羅を持ち、太く逞しい身体になつていた。

「誰かハツチを開けてくれ」

「でつ…でもよ爺さん、外にはゴキブリ共が!!」

「大丈夫だそれぐらい、それに班長がいるだろう」

老人の発言に何人か驚いたものの、戦闘要員の一人であろう女の発言によつて乗組員の一人が恐る恐るハツチの開閉ボタンを押した。

ゴキブリの瞬発力

それは人間大にすれば一步目から時速320キロで走り出すことに当たる。

そして素早く隙間へと潜り込める彼らはハツチが開く瞬間を見逃しはしなかつた。網の隙間も難なく通過し忌々しき存在へと手を伸ばー

「速いから何だ?」

飛び込んできたテラフォーマーは一瞬のうちに首をつかまれた。

当然のように反撃しようと左腕を伸ばす。しかし、その腕が切り落とされる様を、自分の体が横たわるのを、硬い床から見上げることしかできなかつた。

「頭落としても動けるつてのは面倒だな……ザントガ君、悪いがソイツをサンプルとし

て確保していってくれ

「任務開始だ」

老人は近くにいた男に、確保を頼むとテラフォーマーがかけた網へと手を伸ばす。

第2話 海漂林の猛者

一蟹

それは海だけに留まらず、川や沼、果ては陸上にまで適応した生物である。硬い甲羅に覆われ、種類によつては深海の圧にも耐える。

それが人間大となつた場合……何者をも寄せ付けない猛者となる——

ロギンズ・セントルア

M O 手術 甲殻類型

ーシオマネキー

マーズランキング 97位

(記載データより)

(全く……あれのどこがシオマネキだよ……)

(代理で来た観光ジジイ……にしては強すぎるでしょ?)

ロギンズの動きに対し、上位ランカーどころか乗組員全員が驚愕する。

しかし当の本人はそんなことお構いなく、近づくテラフオーマーを物理的に千切つては投げ千切つては投げて確実に殲滅していた。

「ジョセフ班長、手伝つてくださいな。わし一人でやるのはキツくて」「いや、目の前から来てたの全部倒してから言われても……」

脱出機の前方には7体の、7体分のテラフオーマーの肉片がゴロゴロと転がっていた。

（あれ絶対潜りだ……そうに違いない「ツと！」

機体の下に隠れていたであろう、テラフオーマーが呑気に考え方をしている男に殴りかかるうとして頭から真つ二つになつた。

「流石ですな、ジョセフ班長」

「それ程でも。マルシアさん、ハンジ君、後方は？」

ジョセフが後ろを振り向けば二人の人物が機体後方を向いていた。

「185メートル先から接近していた奴ら8体の内、5体は急所を一発。3体が撤退したもののは、1体は両目を損傷し逃げ遅れた所を一発。あの短時間で計6体。流石ですよ、姐さんの腕は」

「全て死んでいるがな」

目視で状況確認をした若い男に対し、女は淡々と答えた。

脱出機の周りには綺麗に切断された網と黒い肉片だけが転がり、荒野の冷たい風が吹き抜けるだけだつた。

「あの…後方のテラフォーマーはどうしますか?」

大人しそうな若い女が遠慮がちに声を上げた。

「いちいち戻るのもなあ…」

「ハンジ、取つて来い」

「オレつすか!?どうやつて!?」

「こう、足で挟んでだな…」

「なんか嫌つす…」

「あの…じゃあ私が「いやオレやるつす! あのくらいチヨロいつす!」

((いや　お前がな))

第6班の心が一つになつた瞬間である。(ゞく一部を除いて)

「いや、靴脱げばいいだろ。お前のベースのこと考えれば」

「「なるほど」」

(こいつら、本当に大丈夫か?)

自身の班に少し不安を抱いたマルシアであつた。

(流石に怪しまれたよな……まあいいか)

乗組員のやり取りを見つつ、ロギンズは先程の行動を思い直した。

幅広く様々な環境に住む。

その中でもその蟹はマングローブに生息している。

彼らは貝類を捕食するときや繩張り争いをする際、あるものを使用する。それは彼らが持つ鋏である。鋏は乾電池すらも潰す程の威力を誇る。鋏を振るう、その姿はまさにマングローブに潜む猛者である！

ロギンズ・セントルア（偽名）

60歳 男性

出身国 スイス（偽装）

マーズランキング 97位（計測時）

MO手術 甲殻類型

シオマネキ（偽装）

正式ベース

甲殻類型
トゲノコギリガザミー

第3話 希望を

—深夜 U—NASAローマ連邦支部—

この時代、地球では度重なる脅威にさらされていた。

2570年代に発生したストーン熱、2600年頃から猛威を振るう

A^{エイリアン}

E^{エンジン}ウ

イルス、リカバリーゾーンを巡る攻防戦、ローマ連邦形成時の暴動…
幾つもの地域で今までの生活を、命を失う者が増えていた。

深夜に訪れたこの女もそんな者の一人だつた。

「閉まつてゐる……最後の賭けだつたんだけどな…」

人目を避け深夜に訪れたことが災いし、施設への扉は固く閉ざされていた。

彼女の一発逆転のチャンスはここに潰えた…：

はずだつた

「ん？…こんな時間にどうしたんじや？ お嬢さん」

女が振り返るとそこには、一人の年老いた男がいた。

「もしかして志願者かの？ これの」

そう言うと老人はポケットから一枚の紙を取り出した。そこにはU—NASAによるアネックス1号乗組員募集の文字とそれに関する情報が記載されていた。

「は…はい！ 私、どうしてもお金が必要で…」

女は勇気を振り絞るように力のこもった声で告げた。

「なるほど…しかし、悪いんじやがクルーの募集は終わって…」

老人は呟きながら若い女を見る。

彼女は俯き、全てを諦めようとしているのが目に見えて分かった。

しかし何故だろうか、彼女からは生きようとする力強さのようなものを感じる。

その様子を見て老人は少し考える素振りをした後、こう告げた。

「一つだけ……方法がある。ただし、通常のクルーより命を失う可能性が高い。そんな危険を冒してまで志願する覚悟は、あんたにあるか？」

先ほどまでとは違う力強く、まるで老人とは思えない気迫に満ちた声に一瞬体がこわばつたものの、目の前にいる男に目を向けて答えた。

「覚悟はできています！志願するかしないか…どちらを選んでも死ぬかもしれないなら私は明日の希望がある方に賭けます!!」

「そうか…」

老人は彼女の覚悟を確かに感じ取った。彼は目を閉じ、そして決意したように目を開き彼女に応えた。

「よしわかつた…今日からあんたは俺たちと同じ地球を救う仲間だ。これからよろしく頼む」

「よろしくお願ひしますっ！」

「ところで名前を聞いてもいいかのお？」

男の口調は戻り、先ほどの気迫が嘘のようになくなっていた。

「私は『リリア・オイカワ』といいます。リリアと呼んでください」

「うむ、よろしく頼むリリアさんや ワシはロギンズじや、とりあえず施設に入ろう。力ギはワシが持っているから」

老人がカードキーを使い扉を開けると、二人はローマ支部の施設へ足を進めた。このリリアの志願によりアネットクス1号乗組員、全員が揃つた

—リリア参加より6時間後 U—NASAドイツ支部—

「今日だろ？俺たち第五班の新しいメンバーが来るのつて」

「そうだよ、なんか楽しみだね」

「可愛い子だといいな…」

「アントニオ、顔緩みすぎだ」

施設内の廊下を楽しそうに話を進む集団がいた。

彼らはアネットクス1号のドイツ・南米第五班のメンバーであり、火星でのミッションに挑む戦士でもある。

この第五班は他の班と比べ、メンバー同士の仲がとても良く普段からこのようにお喋りを楽しむ姿が見られる。

しかし、そんな彼らを良く思わない者も多い。

「役立たず共が…」

一人の研究員の男がボソッと彼らとすれ違いざまに呟いた。

実はこの第五班には、火星環境下におけるテラフォーマー制圧能力のランキング、通称『マーズランキング』の上位者がごく少数しかいない。ほとんどの者はランキング下位であり、戦力としてはあまりに弱く足手まといと言つても過言ではないほどである。

ウイルス獲得において脅威になるテラフォーマーに対する戦力が不足していること、それは任務遂行が極めて難しいことを示していた。

そんな研究員の言葉が耳に届き、一行の表情は一瞬で沈んだ。

「おい、誰が役立たずだつて？」

「ヒツ…」

そこには、ぼさついた茶髪で人相の悪い男が立っていた。

彼は研究員を見下ろし、ポケットに突っ込んでいた右手を研究員の左肩に乗せた。

「その言い方するつてことは、テメエはあのゴキブリ共とやりあつても勝てるつてことだよなあ？ 何だつたらオレと訓練室に行くか？」

「やつ…やめてくれ…」

「だつたら黙つてろ。戦いもしねえ癖に威張つてんじやねえ」

そう言つて男は研究員の肩に乗せた手に力を入れた。小さいものの殺気のこもつた声に、研究員はヘビに睨まれたカエルのように恐怖で動くことができなくなつていた。

「わかつたらどつか行け、腰抜け」

「ヒイイイイイイ!!!!」

男の言葉で、研究員は情けない悲鳴を上げながら一目散に廊下を走つていつた。

(つたく、これなら第五班のほうが度胸あるわ)
ぼさついた髪を搔き、『ルーク・ベルト』は心の中でぼやきながら第五班のメンバーに近づいて行つた。

「あ、ありがとう：ルーク」

「でも俺たちが役立たずなのは変わりないから…」

「あ？ 何言つてんだ？ お前らのことなんてどうでもいい……戦いもしねえ癖に威張つて能無しが気に入らなかつただけだ」

ルークは言いたいことだけ言うとその場から立ち去つた。

「それにお前ら、訓練してちつたあ戦えるようになつただろ：」

振り返らずルークは呟いた。あまり大きな声ではなかつたが、第五班のメンバーには十分耳に入つた。

「ルーク！」と嬉しそうな声を上げてメンバーはルークに追いつこうと駆け出した。

第4話 水面下で

—U—NASAドイツ支部—

その日の食堂はいつも以上にぎやかであつた。それもそのはず、U—NASA本部から班長であるアドルフが戻ってきたことに加え、ドイツ・南米第五班のメンバーが初めて顔を見せたのである。

「初めまして：エヴァ・フロストと申します。皆さんよろしくお願ひします…」

「おー！エヴァちゃんね あたしイザベラ これからよろしくな！」

「オレはエンリケ これからよろしく」

「サンドラといいます。長旅お疲れさま、エヴァちゃん」

「……可愛い」

(アントニオの奴惚れたな…)

初めての環境でやつていけるか不安に感じていたエヴァだつたが、第五班の雰囲気を見てひとまず安心した。

一方、にぎやかなエヴァ歓迎メンバーから少し離れたところではルークが班長であるアドルフを出迎えていた。

「ルーク、オレがいない間何かあつたか?」

「特にはありません。班長、長旅お疲れ様です」

「そうか、お前もご苦労だつたな」

「それだけ言うとアドルフは施設の奥へと行つてしまつた。

「随分と嬉しそうだな、ルーク」

「ああ? んだと、『レイ』!」

ルークの目の前には、キヤップを被つた少年のような人物がいた。

「全く、山賊のリーダーが今じや班長に陶酔しきつてているとは…呆れるな」

「うるせえな……ところでお前は向こうに何しに行つてたんだよ、ちび助」

「テスト品が出来上がつたから取りに行つただけだ」

そういうとレイは左腰に差したものに手を触れた。腰のそれは、まるで刀のように鞘に収められていた。

「おいおい、専用武器そぞれをそんな風に持ち歩いていいのかよ…」

「今の状態じやあ、武器としての能力は發揮することはできないから問題ない」

「そうかよ……まあお前の場合、武器がなきや俺より戦力で劣るもんな」

「何とでも言え」

キヤップを深く被り直すと、レイはそのまま施設の奥へと早足で向かつた。

その光景を話に区切りがついていた歓迎メンバーたちが見つめていた。ほとんどの者はいつものことと呆れているが、初めて目にしたエヴァは不安げな表情をしていた。

「あ…あの、あの人も五班のメンバーなんですか？」

「ああ、そうだ」

「そういえばまだ紹介してなかつたな…あそこのイカツい奴はルークだ」

「口調もキツめで暴力的だが、意外と仲間思いの奴だぜ」

「レイとはそりが合わないみたいで、いつもあんな感じだけどね」

「おいそこ、何コソコソ話してんだ！」

小声で話していたにもかかわらずルークに見つかり、メンバーはエヴァを連れ一目散に食堂から撤退した。

「ついでだからこのまま施設の案内しない？」

「それ、いいアイデアだな！」

撤退しながらもにぎやかに話すメンバー、その様子を見て思わず笑みをこぼすエヴァだった。

(ところでレイさんって…)

—国連航空宇宙局ロシア支部—

ロシア支部のとある一室、男一人に女二人が何やら怪しげな動きを見せていた。

「やつと、やつと!!! やつと見られる!!!」

「まさか、あんな街外れの店で扱っていたとは…」

「ようやくですか……僕、ずっと見たかつたんですよ!」

『ニコライ』君、喜ぶのはいいけど早く準備して!」

「はいはい、わかつてますよ『メリア』さん……」

「私、ポップコーンとコーラ持ってきます!」

『レイラ』ちゃん、私はジンジャーエールがいい

「わかりましたーーー!」

そう言うと女が一人、部屋の外へと出て行つた。

すると先ほどまで賑やかだった部屋の雰囲気は一変し、しんと静まり返つた。

「会合のほうはどうでしたか、ボス?」

「六に一人追加:か弱そうな女だつた」

男女は小声で情報共有を始めた。その表情は、先ほどまで騒がしくしていた人物たちとは思えないほどの真剣なものだつた。

「そつちでは何かあつたか?」

「例の青年が手術に成功したと、それからドイツの手術リストが判明したことです」

「そうか…また騒がしくなりそうだな」

「ドイツのベースは戦力になるとは言い難いですが、もしこちらが手にできれば強力な切り札に…」

「いや、いい…関われば面倒なことになりそうだ。それにこちらが欲しいのは戦力だ。町一つ奪えるほどの力…それだけあればいい」

「わかりました…彼女が帰ってきたみたいですよ」

すると部屋の扉がドンッと大きな音を立てて開かれた。

「ポップコーンとコーラ、それからジンジャーエール持つてきました！」

「ありがとう！」

「気のせいか、ポップコーンの量が少ない気が…」

(ギクッ)

「そそそそんなことより！ニコライくんは準備終わつたんですか!?」

(つまみ食いしたな…)

「終わりましたよ。さ、見ましようか」

「そもそもそうね、と言ふとメリアは紙袋の中身を取り出した。

「やつと見れるわ、シャー〇ネードシリーズ全作!!!」

「やつたあ!!!」

「……は？」

目を輝かせる二人とは対照的にニコライは凍り付いていた。

「なんで!? いや僕は歴史的名作を買つてくるつて聞いてたんですけど!?」「え? 名作だつてこれ!! あまりにも伝説的すぎてネットで見つからなかつたくらいなんだから!!!」

「いやそれつて……僕、ジユラ〇ツクパークシリーズ期待してたのに……」

「え? この映画恐竜も出るらしいですよ?」

「サメ映画だよね!!」

先ほどまでの緊張感は鳴りを潜め、部屋には賑やかさが戻つた。

—U—NASA本部—

本部のトレーニングルーム。ここでは火星で活動できる体の基礎を作るために、一般人が行う以上に厳しいトレーニングが行われている。

この日も、いつものようにアネックスのクルーとなる人々が体を鍛えていた。そして人々はいつものように、とある二人に視線が釘付けとなつていた。

一人は金髪の女、もう一人は短髪の男だつた。

「流石ですね、ミッセル副長」

「お前もだろ、『マイク』」

そう言いつつ二人は100kg近いバーベルを持ち上げていた。

両者、にこやかな表情でバーベルを上下させる。この光景は一般兵にとつてはもちろん、戦闘員にとつても驚異的なものである。

「おつと、今日は会議があつたか……ミツシエルさん、準備をそろそろしたほうがいいですよ」

そう言うと男はバーベルを下した。男の体は鍛え上げられ、筋骨隆々という言葉がふさわしい姿をしていた。

「そうだつたな……」

すると何かに気付いた男が二人、ミツシエルとマイクの元に駆け寄った。

「ミツシエルさん、やっぱりここにいたんですか」

「おう、燈に『ビリー』か」

「珍しい組み合わせだな」

「病棟から出たところにビリーさんがいて、会議室に向かつているつて聞いて一緒に来たんですよ」

「なるほどな、ところで彼女の容態は……？」

「体のほうは安定しているらしいんですが、まだ目を覚まさなくて……そつ、それより今

日会議ですよ！」

「おつと、流石に準備しないとマズいな……」

「今日は差し入れにプロテインクッキー持つてきました！」

「おお、それは楽しみだな」

「おい、準備行くぞ！」

「わかりました。じゃあまた後でな」

二人はそう言つてトレーニングルームを後にした。

「僕らも行こうか、燈君」

「そうですね……」

会議室へと向かう中、燈は一人もやもやした気持ちを抱えていた。

（いつになつたらまた目を開けてくれるんだ——百合子）

—U—NASA 機器製造部—

アネックスで使用する機器を製造する研究室。その地下、厳重に閉ざされた扉の向こうでは研究員たちが様々な部品やデータを研究、管理していた。

「そつちの研究はどうだ?」

「とりあえず運用できる形にはなりそうです」

研究員は技術部所長に立体映像を表示して見せた。

「……それにしてもこんなもの、本当に武器として扱いきれるんですかね?」

「普通の人間なら100パーセントこんなもの扱えない。そしてあの火星のゴキブリ共も扱えない……戦闘員一人ひとりに合わせ作られた奪われない人類の技術、それがこれを含めた専用武器だ」

(しかし戦闘員に合わせてているとはいって、これは最悪使用者を殺しかねない……)

所長の視線の先には、何の変哲もない手斧の立体画像が表示されていた。

第5話 向かう心

—2620年3月4日 アメリカ合衆国ネバダ州南部—

この日、とある目的のためにU—NASA関係者がこの地に集結していた。

「燈、百合子の容態はどうだつた…」

「容態のほうは今のところ安定しているらしいです。ただ、まだ目は覚まさなくて…」

そう話をするのは、U—NASA関係者である膝丸燈とその上司であるミツシエル・K・ディヴスである。

彼らの話題に出ている百合子—源百合子は燈と同じ児童養護施設で育つた仲であり、燈の想い人であり、そして現在昏睡状態に陥っている少女である。

彼女は数年前に一部の臓器を変化させてしまうA・Eウイルスに感染し、闘病生活を余儀なくされた。

その後、彼女の治療費を稼ぐため、そして致死率100%のウイルスに侵された臓器

を移植という手段によつて治療するため、膝丸燈はタイ王国の地下闘技場で賞金を稼ぎに向かつた。

彼は地下闘技場において勝利したものの、闘技場関係者は彼に賞金を払うどころか百合子の移植ドナーすら探さず二人を闇に葬り去ろうとした。しかし、U—NASA職員によつて彼女は救出されU—NASA本部で一命を取り留めた。

燈も彼女を救うために、U—NASAのとある志願兵となつた。

そして、救出後から今に至る一年、彼女は時より目を覚ましては昏睡を繰り返し、生命活動も予断を許さない状態である。

「そうか…」

「でも、俺のやることは変わらない……この悲しみの元を断つ

約束したから…百合子とも桜人とも

「じゃあ守らなきやな、燈」

「俺たちも手伝うぜ」

「ボクもその手伝いしますよ、燈くん」

「マルコス、アレックス……ビリーさんも！」

氣付けば燈の傍には、これから行動を共にする仲間が何人もいた。

「それに燈くん、多分皆同じことを思つてゐるはずだよ……」

『与えられたこの可能性を確実に手にする』

つてね』

(そうだ……俺だけじゃない。皆、何かを背負つてここにいる。
俺たちは……)

「この運命に打ち勝つてみせる」

——この日、大型有人宇宙艦『アネックス1号』が人員計150名を乗せ、宇宙へと旅

立つたー

■ 大型有人宇宙艦 『アネックス1号』

■ 人員内訳

艦長

小町小吉 1名

幹部乗組員

6名（艦長も含まれる）

乗組員

144名

■ 目的

- ・火星由来と考える病原体『A・Eウイルス』のサンプル獲得、調査、及びその近縁種の調査

- ・サンプルを獲得した状態での地球への生還

■ 注意事項

: : :

火星に生息するゴキブリ、通称『テラフォーマー』から身を護ること

いた。

—アネツクス出発初日—

艦内ではにこやかな表情のものもいる。しかしこれから行われる探査のこと、あるいは地球に残してきた大切な者たちのことを考え浮かない表情の者が、乗組員の半数を占めて

「大丈夫かな…」

彼女、リリア・オイカワもそんな乗組員の一人である。

彼女はこのミッショ nのために仲間と共に特訓を重ねた。そして命懸けのミッショ nであることも覚悟して來た。

しかし、宇宙に旅立つたことを実感するとどうしたってこの先に待ち構えている危険を考えてしまう。

それと同時に彼女はサンプル回収だけでない、もうひとつ的重要なミッショ nも背負っている。彼女が不安に思うのも無理はなかつた。

「そんなところに突つ立つてどうした？」

「……あ、レイさん……」

声がして振り向けば、ドイツ・南米第五班に所属しているレイが彼女の傍まで来ていた。

「キャップ：被つてないんですね」

「ああ……持ち込みができなくつてな。…………やっぱ変か……」

レイはぼそつと呟いた。

地球にいた頃にずっと被つていたキャップは、持ち込みの際に不要とされ置いて行かざるを得なかつたのだ。

「いえいえ、そんなことないですよ！ 十分可愛いですよ!!」

「…………なつ!?」

彼女の頬が一瞬にして淡い色に染まつた。

というのも、彼女はとある理由から普段は無表情でクールに振舞い、可愛らしさなど微塵も感じさせないようしている。そのせいか「可愛い」というような扱いに対する免疫がないのである。

「何を……そんな訳ないだろっ！」

いつもの癖でキヤップを深く被る動作をするものの、キヤップがないため、ただただ空回るだけだった。

「あ、ああああっ！ クソッ!!

(やつぱり可愛いな…)

「…………こほん、オレのことはいい。

それよりお前はどうしたんだ？ 浮かない顔を

していたが

「…………正直、怖いんです。私が役割を全うできるか…」

「……っ」

リリアの言葉にレイは一瞬顔をゆがめた。

「覚悟して来たのに、やつぱり怖くなつて…… なんかダメですね」

「そんなことないのではないでしようか？」

「!? あなたは?」

向かい合つていた二人の横に、一人の男が立つていた。

「申し遅れました。僕はロシア班に所属しています、ニコライ・ポレヴォイです。ニコライとお呼びください。」

そう言つてニコライは一礼した。

「すみません、会話が聞こえてしまつたので… えつと、リリアさんでしたか?

怖いと思うとは当然だと思いますよ

誰だつて大切なものを背負いながら事を成そう、命を懸けて事を成そうとする時は恐ろしいという気持ちに支配されてしまいます。

ましてや大切なるものも命も懸かっているとなれば尚更のこと」とするとニコライはリリアの目の前に右手を出して見せた。

「そんなとき、忘れていけないのが笑顔です」

次の瞬間、ニコライの手からスマイルが描かれたトランプ大のカードが現れた。「す…す…す…い！」

「怖いと思つた時はまず笑つてください。そこから心を落ち着けるのです。笑顔を作つて自分に余裕だと暗示をかける、すると体から余計な緊張が抜けてすつきり動けます」話しながら手にしたカードの上に自らの左手をかざす。するとニコライの手からカードが消えた。

「師匠の遺した教えですが…きっとあなたの役に立つと思いますよ」

何かに気付き自身の左手を見るリリア。すると先ほどのカードが手の中にあつた。

「それはあなたへのプレゼントです。そして先程のことを忘れないでください」「…!! はい！ ありがとうございます！」

ニコライの言葉で、リリアに再び笑顔が戻つた。

「そうです、その笑顔です。もう大丈夫そうですね。
それではお嬢様方、私はこれで……」

抑止としてのご活躍……期待しています」

「!?」
「！」

去り際にニコライが最後に小さく発して言葉、それを聞き二人は驚きの表情を隠せなかつた。

（なぜそのことを……!? それを知っているのはここでは私を含め8人だけのはず……）
（そういえばあの人、どこかで見たことあるけど……どこだつたつけ?）

—その日の夜—

艦長室の中、静寂に包まれたその空間で小町小吉は一人考え方をしていた。

（もう一度火星に行くことになるとはな……）

すると左腕のアーマー部分が僅かに光つた。

「おつと、もうそんな時間か……」

小吉は、アーマーを確認し始めた。

(1が緑、2も緑、3…4もOKつと……ん？ 5だけ赤……)
アーマー部分に小さく入れられているランプを確認すると一か所だけ赤い光を発していることに気付いた。

(レイか…それとも第五班で何かあつたか…)

小吉はすぐさまアーマーの別の箇所をタッチした。

「レイ……今、通信しても問題ないか？」

『はい、問題ありません』

「何かトラブルでもあつたか？」

『一人、我々の存在に気付いていると思われる人物がいます』

『!? それは誰だ?』

『第三班のニコライです』

(ニコライ……第三班といえばメリアが担当していたな……)

「わかった。明日メリアに聞いてみる」

『連絡は以上です』

「連絡 ありがとうございます」

通信を切ると小吉は考え方を再開した。

(まさか、気付いている奴がいるとはな……

火星における抑止力の存在に)

登場人物話 L y r a (ライラ) 輝く下で

ローマ連邦の田舎 そこで私は生まれた。

のどかな風景、都会にも憧れていたけどこの村から離れることはないと思つていた。

母はこの国で生まれたものの、この村には一人で越してきた。どこで育ち、なぜこの村に来たかを語ることはなかった。

一方、父は日本人だった。色々な国で仕事をしていく、仕事でこの村に訪れた時に母に出会い、恋に落ちたそうだ。

それから数年後、星が綺麗な夏の夜に私は生まれた。

父も母も愛情を持つて育ててくれたけれど、父は仕事が忙しく家族との時間は少なかつた。

私も父との思い出は少ない。

父との思い出でよく覚えているのは、5歳のある夜のこと……
どこかの緑に輝く星を指さして『リリーのお祖父ちゃんの妹はあの星に行つたんだ』

なんて教えてくれた。

どの星か忘れてしまったけれど、私もいつか行ってみたいな…そんなことを思った。

私の世界が狂い始めたのは7歳の時

父が、東南アジアの支社で仕事をしている時に火事に巻き込まれ、二度と帰つてこなかつた。

しかもどういう訳か、支社の金を持ち出そうとした最低の人間であると処理された。

もちろん、父がそんなことをする人間ではないことくらい、私も母も、父をよく知る人たちもわかっていた。

火事による混乱に乗じて、父に罪を被せた人でなしがいる。そしてそれが会社の上層

部の仕業であることは会社の対応が物語つていた。

死人に口なし

私たちの声は、眞実は握りつぶされ、多額の借金を背負わされた。

それからの生活は以前より貧しくなった。母は私のために身を粉にして朝から晩まで働いた。私も母の手伝いになればと思い、簡単なお土産を作つてお店に売り渡すことを始めた。

私が学校に行く余裕なんてなかつたけれど、近所のおばさんが読み書き、計算、色んなことを教えてくれた。

周りの人はみんな優しかつた。私たちにおすそわけをよく持つてきてくれたし、母が帰つて来れない日には隣のご夫婦が夕飯をごちそうしてくれた。お土産屋の店長はよく頑張つているからとお土産代とは別にお小遣いをくれたし、店長の娘さんは私を妹のように可愛がつてくれた。

父がいなくなつて悲しいことは変わらなかつたし、貧しい生活ではあつたけれど、暖かい日々だつた。

いつか私もしつかり働くようになつて、母とこの暖かい村でもつと幸せに暮らそ

う。そんな夢みたいなことを考えていた。

ささやかな幸せは今から5年前、再び崩れ去った。

世界中で猛威を振るつたA・E・ウイルスが、ついに村を襲つたのだ。

穏やかだった村は徐々に蝕まれ、重い空気が流れるようになつていた。
最初に感染した店長さんは1か月後に亡くなつた。

隣の家の旦那さんは家から出てこなくなつた。しばらくは奥さんと生まれてくるは

ずだつた子の名前を叫ぶ涙交じりの声が聞こえたけれど、いつしか何の音もしなくなつた。

日に日に村の中で人を見かけることが少なくなつていた。

そしてついにウイルスは私の母も蝕み始めた。

政府から援助がなかつたわけではないが、治療費や入院費にはとても足りなかつた。せめて症状が和らぐように、治療費を稼がないと…しかし私の働いていたお店はもう営業できる状態ではなかつた。

私は稼ぐために、村の外へ、そして夜の世界にも足を踏み入れた。

辛いこともあつても母のために無我夢中で働いて稼いだ。

今までの恩を返す気持ちもあつたが、それ以上にたつた一人の家族を助けたいという気持ちが強かつた気がする。

それから数年から経つた頃……今から半年前のことだつた。

店長の娘さんの容態が悪化したという話を聞き、村に戻り見舞いに行つた。

私が行つたときには容態は安定した。しかしあまり時間がないことも明らかだつた。なんて声をかければいいか……私が言葉を探していると、ベッドに横たわる彼女は思い出話を始めた。とても懐かしい、あの暖かい頃の思い出……相槌を打つていてるうち

に、気付けば話に花が咲いていた。

話に区切りがついた時、彼女はベッドの横にある棚を開けて欲しいと言つてきた。彼女の言う通りに棚を開けると、封筒と一枚の紙が入つていた。

封筒には札束が、そして紙は何かのチラシのようだつた。

「もう私には必要のないものだから、あなたにあげる」

「何で……」

気付けば言葉をこぼしていた。

彼女は、「もうこの村でウイルスに罹つていなければあなただから、それに私がとつて大切なあなたの助けになるならそれで充分」、そう言葉を返した。

「今日中にあなたのお母さんに顔を見せて、それからチラシに書いてある場所を目指して行きなさい。もうこの村に戻らないで」、さらに続けてそう言つた。

私が何か言おうとするが、早く行つてと怒鳴つた。滅多に怒らない彼女のそんな声を聞いて、私は棚にあつた二つを持ったまま部屋を出てしまつた。

「明日を生きて」

最後に聞こえた声はやつぱり、優しかつた。

混乱する頭を抱え、そのまま母に会いに行つた。

母はベッドの上、弱弱しい声で おかれり と声をかけてきた。

稼ごうとも稼ごうとも、ついにこの時になつても、母を設備の整つた病院に連れていくことは出来なかつた。

母は悟つていたのだろう……貧しい思いをさせたと謝つた。それから私のために無理して稼いで、看病してくれてありがとう。

母は私に涙ながらにそう伝えてくれた。

言葉を交わし終わると母も、早く村から出るように言つてきた。

なんで：なんでそんなことを言うの……理解できない私は、ここを離れたくないと駄々をこねた。

すると母は私の頭を撫でながら、

真夜中になる前に地下の物置に隠れていること、そして何があつてもそこから出ないことを約束するなら今晚いてもいいと言つた。

それから母に物置に行くようにせかされるまで、ずっと今までのことを語り合つた。本当に他愛もないこと、それでいて本当に幸せだった……何度も何度も涙がこぼれて、その度に笑いあつた。

そしてその時は訪れてしまつた。

車のエンジン音が近づいてくるのが聞こえた。それも何台も。ほとんどは通り過ぎて行つたが、一台は私たちの家の近くに停まつたようだつた。私のいる真上、母のいる部屋へと向かう足音が響いた。

そして母の部屋から数人の男と母の声が聞こえた。
うまく聞き取れはしなかつたが、私が戻つて来ているかどうか確認しているようだつた。

話はすぐ終わり、そして何かを運び出しているような音がした。

母が連れ去られる。直感でそう感じた。

止めなきや、一步踏み出そうとして部屋の隅にある古びた机に目が行つた。

埃をかぶつた机、その上に何故か綺麗な手紙が一つ置かれていた。それを見たとき、母との約束と母の表情を思い出し、部屋から出てはいけないと足を止めた。

車がどうやら離れた頃、その手紙に手を伸ばした。

手紙には、その机の引き出しに今あるお金が入つていてこと、もう母や村の人がここに戻る日はないこと、そして父と母はその娘である私を心から愛してくれていたことが書き込まれていた。

『あなたは、明日を生きなさい』

最後に書かれたその文が、一人残つてしまつた私の心に深く刺さつた。

星の輝く夜、私は一人無音となつた村を出て、チラシにあつた場所に向かうことにしてた。

二人が託してくれた命を明日に繋げるために

これが私 —リリア・オイカワ— の
明日への旅立ち

第6話 遭遇

地球を出発してから39日

目の前には目的の地であり、これから戦場に変わる星——火星——が迫っていた。アネックス1号内では、あと二時間で任務が始まることに對して不安を覚える者、心を落ち着かせようとするとする者、普段と変わりない表情の者と乗組員たちは多種多様な反応を示していた。

シャワーを浴びて気分転換しようと考へる者が、一人くらいいてもおかしくはない。

彼女【ヨウ】がその一人だ。

(あんまり考えたくないけど、自分や班員の命が係つているとなるとねえ……)

もし彼女の所属する第四班が通常の任務を行うだけの班であれば、彼女はここまでモヤモヤした気持ちを抱えることはなかつた。それこそ、任務開始前にシャワーを浴びてまで気分転換したいと考えるほどには。

(しようがない……後は班長やジエットに従つて動こう。もう考へてもどうしようもないし、それでいいこう)

彼女は、ようやく自分の気持ちに折り合いをつけた。

このとき、彼女は気付いてはいなかつた。すぐ近くに迫る黒い絶望の存在に：

「じょうじ」

—メインルーム—

男がそれに気付いたのは偶然の出来事だつた。

男は未知の世界、襲い掛かる脅威、それを潜り抜けながら、ウイルスサンプルを回収し地球に帰還する……目の前に迫る恐怖心や緊張で震えていた。

震えながらも、自分を落ち着けようと思考を巡らせた。そして、男はとあることに気が付く。

それは男が非戦闘員であつたことだ。

基本的に戦闘には参加しない。いざとなれば、班長や戦闘員が守ってくれる。なんだ…これなら心配はない。恐れることなんてない。

気持ちが軽くなつた彼は胸を張り、上を見上げた。

それが絶望との遭遇だつた。

「テラフォーマー!?」

その場にいた誰かの叫びが引き金となつた。

「じょうじ」

天井に張り付いていたテラフォーマーは、一声上げると素早く地面に着地した。その光景を見て咄嗟に動けたのは、その場にいた乗組員のほんの一握りだけだった。

その中に、彼は含まれていなかつた。

真横に現れたテラフォーマーを目の当たりにしてなお、彼の意思で動くことはなかつた。

黒い腕が男の腕をつかむと男の体の上半身だけが、内側のものをこぼしながら持ち上がつた。

自身の体に起こつた出来事を、男は理解できずにいた。

元凶は、その光景をしばらく見つめると、興味を失つたかのように男を床に落とした。そして男の頭を踏みつぶした。まるで人が足元の蟻を気付かずに踏むように、何事もなく、無表情で。

その光景を目の当たりにして、戦闘員の数名が咄嗟に構えた。しかし、彼らは戦うつ

もりは一切ない。

戦闘員とはいへ人為変態用の薬がない状態でテラフォーマーを対処できる乗組員は、班長達を除けばデータ上片手で数えられる程度しか存在しない。

この状態でテラフォーマーが襲い掛かれば、何もできず一瞬で殺される可能性が高い。それこそ先ほどの光景のように……戦闘員の誰もがそれを理解していた。ではなぜ構え、臨戦態勢に入っているのか。

それは恐怖である。

今日この日までに訓練を重ね、誰一人準備は怠らなかつた。
しかしそれはあくまで訓練である。

今、この光景は理解を超え理性を失わせるには十分だつた。

絶望との初遭遇に、彼らは人間でいられなくなつていた。

しかし全員が恐怖に呑まれていたわけではない

「皆下がれ!!」

とある老人から発せられた、力強いその声にその場が大きく動いた。

非戦闘員は大きく後ろに下がり、戦闘員は冷静さを取り戻し、非戦闘員を守るように前に立ちはだかつた。そして勇気あるものが班長の捜索や薬の確保に向かつた。

好転したかにも見えたが事態は何も変わっていない。

絶望がすぐに襲い掛かるなど目に見えていた。

そしてこの状況を変えることのできる者も葛藤していた。

(ここ)で人為変態くか……そうすれば状況は簡単に変わる。だが、肝心な任務がばれることになる。(ここでばれれば……彼らの命が……)

義手を握り、老人：ロギンズは背負うものによつて動くことができずにいた。

そのとき、一人の人物があるものを抱え入ってきた。

「おまえら退がれええ!!」

「ボーン!? お前、そんな防犯器具で……無茶だ!!!」

彼は震えながらも、抱えていた対人用の機関銃を迫りくる絶望に向けた。

「そうだ只の防犯器具だ、人間のコソ泥対策のな……それでもやるしかねえじやねえか
!!!」

来やがれ バケモノがああああ
!!!!」

雄たけびを上げながら、銃を乱射するボーン。

銃弾は確かにテラフォーマーの黒い体を貫き、後ろに仰け反らせた。
しかしそれはほんの少しの間だけだった。

テラフォーマーは銃弾を浴びながらも、彼の方向へ歩き始めた。

弾丸は容赦なく体を貫き続けている。体から白い体液が流れる。

しかしまるで効かないとばかりに、その歩みは止まることがない。

（やつぱりダメだつたか……それでも、やれることはやつた。俺が稼いだこの時間で、少しでも誰かが助かればそれで……）

遂に眼前にまで迫った絶望を見つめ、ボーンは悟つた。自分自身の最期を……

「全員伏せろ！」

次の瞬間、テラフォーマーの右目が弾けた。

何が起きたのか、右目を気にすることなく元凶を確認しようとすぐに振り向いた。

そして体を貫かれた。黒い体を貫いたのは先程と変わりない弾丸だった。

しかし、テラフォーマーは歩き出すことも襲い掛かることもなく、その場に膝をついたかと思うと白目を剥いて横たわった。

「慢心して自分の強度を忘れるなよ、ゴキブリ」

機関銃を肩に担ぎつつ、マイク・マイケル・メイトリクスは呟いた。

「自分の弱点に当たらないからって、その体が貫かれてる時点で殺される可能性を考えておくべきだつたな。お前みたいな的なら一点狙いの狙撃も造作もない」

マイクの銃弾は、確かにテラフォーマーの弱点である食道下神経節を貫き、破裂させていた。

横たわるテラフォーマーの横をそのまま通り抜け、彼はボーンの元まで向かう。「ボーン、助かった。お前の勇気のおかげで、仲間たちは救われた」

マイクの登場と彼の言葉で、その場にいた者たちは覚悟を決めた。この先に迫る恐怖と対峙する覚悟を

(お前らの好き勝手にできると思うなよ、ゴキブリ共)

マイケル・メイトリクス

(愛称:マイク)

43歳 男性

出身国 アメリカ合衆国

M〇手術 ■■型

■■位

マーズランキング

元特殊部隊隊長

—シャワールーム—

水の音が延々と聞こえる個室……正確には個室であつたというべきか。

その扉はひしやげ、役割を成していない。

その室内は水で満たされていた。見れば水道が破裂し止めどなく水があふれ出でてい

りかかる。そしてその部屋の壁には、胸元に深い刺し傷のあるテラフォーマーの亡骸が一体、寄りかかっていた。

第7話 始動

時を遡ること、20分前

—シャワールーム—

彼女・ヨウはまるで凍つたかのように動くことができなかつた……

シャワーの個室の扉を、誰かがずっと叩いているのだ。

ヨウ…そして彼女の所属する第四班の人間は、とある理由から生身での戦闘力も高い。力において不足はない……しかし、これはそれ以前の問題である。

何者かもわからない者が、扉を叩き続いているこの不気味さ……未知の恐怖

(決めた……誰だろうとぶちのめす……変態に屈しててやうなあたしじやない……)

「どこの誰だー

彼女は不気味さを感じつつも、この現状を打破するために動くことにした。

「しゃがめ
ヨウ
!!!!」

その声を聞き、彼女は咄嗟にしゃがむ。瞬時に動けたのは日頃の訓練によるものもある。

しかし一番の理由は、発せられた男の声に聞き覚えがあつたからだ。

ガツンッ!!!!

石の棍棒が彼女の胸部があつた位置を通過し、扉を破壊した。

「じょうじじ」

後ろから聞こえる声は、本来この場にいるはずのない脅威

自分の背後にいる存在……本来であれば、認識した瞬間恐怖に恐れ慄いていたかもしれない。

しかし、彼女は余裕の表情をした。

それは彼女が、自分の身に降りかかった危機を脱したことを理解していたからである。

テラフオーマーが棍棒を振り上げようとした瞬間、扉の向こう側から目にも止まらぬ速さで男が持つナイフが、その黒い体の胸部を貫いた。

「じょっ」

咄嗟に反撃しようと男に撲みかかるとするが、男は慣れた手付きでナイフを左手の平を使って深く押し込む。

決着は一瞬であつた。勝敗は胸部から多量の体液を流す亡骸が物語つてゐる。白濁と透明の液体が混ざり合う床の上、ナイフを引き抜いた男はおもむろに言葉を発した。

「間に合つた」

「…………何が間に合つた、だ!!!もう少しともな助け方はなかつたのかよ!!!
!!!!」
【星】

「あの状態じゃあ、ああするのが手つ取り早かつたからな……万が一、お前がアイツをまともに見てたら動くのが遅れてただろうし」

「そ……それは……そうかもしけなかつたけど……それでも、やり方つてものが
……」

そんなヨウの様子を見て、男は何かを理解した。

「まあ、大丈夫だ。俺はそんなので欲情はしない。だから安心しろ」

「そういう問題じゃない！　この馬鹿!!!!!!」

……一糸纏わぬ女に無抵抗で殴られる男の姿がそこにはあつた。

「それにもよくあがいるつて気付いたね」

「感覚……としか言いようがない。もう体に染み付いているからな……」

着替え終わつたヨウからの問いに、男はなんてことないよう答える。

「そろそろ行こう。多分、U—NASAが考へていた本来とは違うプランに変わる」

「……となると、こつちの計画通りに進んでるつてわけね。じゃあジェットたちのところに行けば問題なさそうね」

二人は何事もなかつたかのように、シヤワールームを後にした。
最初の戦場

……そして時は戻る

—火星上空 アネツクス1号—

艦内に侵入したテラフォーマー六体は幹部による駆除四体、乗組員による駆除一体、原因不明の死一体という形で終わつた。

しかし、本艦は火星に侵入する頃には夥しい数の仲間に包囲されることとなつた。地球へ引き返すというプランも謎の圧力により絶たれた。

そのことを受け、艦長である小町小吉は乗組員全員に今後の方針を伝える。

『プランδに移行する』

プランδ 班毎に分かれてアネックス本艦を離脱する、各班がその他の班の目を離れる……U本部—N部A—S部Aが恐れていた方法をとるという内容

乗組員たちそれぞれが想いや覚悟、或いは不安を抱く。
それは特殊な立場にある彼らも同じであつた――

・最高責任者

【小町小吉 《こまち しょうきち》】

・第一班

【マイケル・メイトリクス】

(了解だ、小吉さん)

・第二班

【ビリー・アイザック】

(……なるほどなあ)

・第三班

【メリヤ・ザハロフ】

(やるしかない……)

〔劉星〕
〔リュウ・シン〕
第四班

(.....)

・第五班

【レイ】

(ついに……か……)

・第六班

【ロギンズ・セントルア】

【リリア・オイカワ】

(始まるのか……ミツショング)
(私たちがここに来た、その意味が)

各班に用意された高速脱出機へと、それぞれ赴く。

彼らはU—NASAによつて選ばれた、火星の戦場における抑止力

小町小吉を最高責任者とする計8名の極秘チーム

各班各国の野望、裏切りを阻止し、火星探査本来のミツショングを遂行するために、各班で活動が始まる……

火星における各国の監視及び抑止のためのU—NASA独自選抜チーム

A n t a r e s — アンタレス —

極
秘
任
務
ミツ
シヨ
ン

始
動
スター
ト

第8話 爬道

落下するアネックス1号

機体の側面にはおびただしい数のテラフオーマーが張り付いている。
自分の住処を守るための行動か、それとも……
理由はともかく、その数を増していくテラフオーマーにより墜落を避けることはできない。

だが、これも想定内の事態である。

黒に染まりつつあるアネックス1号から6機の機体が射出された。

『ランδ』

アネックス1号本艦による帰還が不可能となつた場合
全滅を防ぐため6班に分かれ、高速脱出機によりそれ別の方向へと散開し火星へ
と着陸する。着陸後、各班連絡を取り合い本艦へと集合し、艦内を拠点として研究を行

う……

これが緊急用の計画

高速の機体は襲い掛かるテラフォーマーを振り切り、それぞれの着地地点へと飛び立つた。

——こうして火星に戦士たちが降り立つた
仲間の運命を 愛する者の運命を
そして自分の運命を背負つて
この地で目にするものは、希望か 絶望か——

—日米合同班第一班—

「大層なお出迎えだな……」

マルコスがため息交じりに呟くのも無理はなかつた。

第一班が着陸したのはそびえる物が一切ない平野。

一見安全に見えたものの、立ちはだかるようにしてテラフォーマーの群れが前方より接近している。それも一匹二匹ではない。

「50匹…くらいか?」

「マルコスは非戦闘員の護衛を頼む。その他の戦闘員で奴らを叩く!」

班長である小町小吉の指示により、戦闘員はそれぞれの薬を手にする。

「総員、人為変態！」

次の瞬間、彼らの体が急激な変化を始めた。

手術によって埋め込まれた生物の遺伝子が発現していく。

脱皮を 羽化を 彷彿とさせる劇的な変化によって、多種多様な姿へと変化してい

く。

蜂の針、鳥の翼、カニやエビのような甲羅……

完全に生物の特徴が発現すること、それは戦闘の準備が整つたことを意味する。

「じょうッ！」

その一声が始まりの合図となつた。

目にも止まぬ速さで一頭のテラフオーマーが戦闘員たちの目の前に躍り出た。その速さに対応できる者はおらず、一人の頭へと拳が振り下ろされた。

人間より遙かに強い腕力、そこから繰り出される打撃は一瞬にして頭部を破壊——

できなかつた。

男——マイケル・メイトリクス——は攻撃を食らつてなお微動だにしていなかつた。硬くざらついた皮膚からは血が僅かに流れるだけで、目立つた外傷はない。

何かマズい：

テラフオーマーはここで初めて目の前の存在に対し危機感を持つた。

持つたが、遅かつた——

「次はこっちの番だ」

彼の拳が振り抜かれる。

鍛え抜かれた人間の筋力と生物の筋力、二つが合わさつて放たれる力はテラフオーマーの頭部を簡単に粉碎するに至つた。

「これで終わりか？ゴキブリ共」

今度はこちらの番と言わんばかりに戦闘員たちがテラフオーマーへと向かう。その行動が引き金となり、テラフオーマーが一頭残らず駆け出した。

そのうちの二体がマイケルの元へ一斉に襲い掛かる。

圧倒的な力で左右から殴りつけられるが、何てことないようには片手でそれぞのテラフオーマーの喉に爪を立てて握る。

二頭が焦つて暴れようとも鋭い爪が逃走を許すことなく、それぞれの喉が変形する頃にはどちらも動かなくなっていた。

白目を剥ぐテラフオーマーはマイケルの手から離れると、力なく地面に倒れた。

無力に倒された二頭ではあつたが、時間稼ぎには成功していた。

突如として頭のないテラフォーマーが起き上がり、両腕をマイケルの方に向けたのだ。

何かする——それに気付いた非戦闘員たちは叫び、マルコスは駆け出す。

しかしある程度離れた場所での戦闘、そしてマイケルとテラフォーマーは至近距離人為変態後のマルコスでも間に合わないことは明らかだつた。

「マイケル！ 危ないッ!!!」

次の瞬間、煙によつてマイケルの姿が消えた。

「マイケルッ!!!」

「大丈夫だ、安心しろ」

煙が晴れると無傷のマイケルが現れた。そして、先ほどまでいた首なしテラフオーマーは少し離れた場所で死骸として横たわっていた。その体には何か硬い物で打たれたようなひび割れた跡ができていた。

その跡を生み出したのは、テラフオーマーが初めて遭遇する存在だった。

爬虫類の持つ筋肉質で発達した尻尾である。

その生物はトカゲの仲間において最大の種である。

頑丈な鱗、その下に広がる皮骨と呼ばれる鎧、鋭い鉤爪、尻尾：様々な武器と3メートルにもなる巨体から繰り出されるパワーによつて、彼らは生息地の生態系における頂点に君臨している。

島に生息するシカや水牛、かつて生息していた小型のゾウですら捕食する姿は、竜そのものである。

マイケル・メイトリクス

43歳 男性

出身国：アメリカ合衆国

マーブランキング：9位

MΟ手術：爬虫類型

コモドドラゴン

「来いよ、ゴキブリ共…その拳だけでかかつて来い！」

解き放たれし竜による蹂躪が今、始まる

第9話 誓い

マイケル
男は目の前の害虫を叩き潰しながら思い出す
テラフォーマー

地球で交わした約束を

かつて彼は特殊部隊としてある時は人質となつた要人を奪還し、またある時は危険な組織を殲滅してきた。数々の修羅場を切り抜け、不可能とされた任務を遂行してきた。

国を陰から支える最強の守護者

気付けば、史上最短で特殊部隊長に任命され、この二つ名を手にしていた。

影の守護者として長いこと従事していた彼だったが、ある日を境にその座を降りた。それは自分の愛おしい存在を守ることに専念するためであつた。体の弱い妻が残したかけがえのない宝、命に代えても守ると誓つて…

それからは田舎で親子二人、穏やかな日々を過ごしていた。

だが、悲劇は突如として降り注ぐ。

娘が原因不明の病に罹つたのだ。

ありとあらゆるコネクションを駆使し、病の正体に辿り着くまでに時間は掛からなかつた。しかし、辿り着けたのはそこまでだつた。

宇宙から飛来したウイルスが原因の病は、致死率100パーセント そのうえワクチンどころか根本的な治療法すらなかつたのだ。

方法はないのか……藁にもすがる思いで探る日々

そんなとき、とある男が接触してきた。

U—NASA関係者と名乗る男は、彼の所有する研究施設でマイケルにこんな話を持ち掛けた。

『そちらの出す条件を呑む。その代わりに火星における抑止力になつて貰いたい』
怪しげな男のその言葉、普通の人間なら断つていただろう。

『例の病を治することはできるか?』

長年の経験によつて養われた直感、それが脳裏に語り掛けっていた。この男はできると『今はできない。しかし火星からサンプルが入手できれば完治できると断言しよう。

君がこの話を承諾してくれるのならば、君の任務が終わるまで万全の状態で娘さんを守ると誓おう。それくらいの価値が君にはある。君の実力、そして体質……

さあ、承諾してくれるかな?マイケル・メイトリクス君』

やはり……ならば迷う必要はない。娘が救えるのなら

「わかつた。娘の病を完治させること、俺が任務から戻るまで娘の命を守ること。この二つを果たすというなら火星でも木星でも行こう」

こうしてマイケルはアンタレスのメンバーとなつた。

アンタレスとしての役割も火星における役割を命懸けの危険なものではあつた。しかし、彼にとつてそんなものは何てことないものだつた。

娘の命を救えるのなら、何が待ち受けていようとも叩き潰す その思いだつた。

そして時は流れ、火星へと出発する一週間前
この日は出発前娘と顔を合わせられる最後の日だった。

「パパはお星さまのところに行くんだよね？」

「そうだ、星のかけらを持ち帰る仕事だからな」

当然、娘には命懸けの戦いがあることなど伝えていない。

余計な心配などさせないように、君が笑顔で待つていられるように

「パパなら大丈夫だと思うけど、無事に帰つて来てね 約束だから！」

「ああ、約束だ」

「絶対だからね！」

俺は必ず帰る……

俺は必ず地球へサンプルを持ち帰る
そして必ず約束を!!!

「マイケル、ストップ!!!」

「それ以上やるとミンチより酷いことになるから!!!」

仲間の声で我に返る。見れば白と黒の肉片が辺り一面に転がっている。

「すまない…やりすぎたな……」

「息のある奴を探してサンプルにする」

「「了解」」

息のあるテラフォーマーを探すことになつたものの、その大半は息絶えていたため以外にも苦労することとなつた。

…………これに関しては小吉含めた戦闘員全員の気合が入りすぎていたことも原因で

はある。

「小吉さん……申し訳ない」

「気にする必要はないさ、俺もやりすぎちゃつたし！あと前から言つてるけど、俺に対しひてそんな堅くならなくていいから！もつと気楽に…………ん？これは」

「それはさつき襲い掛かつってきたテラフオーマーですね：手から煙みたいなのを噴射してましたが」

マイケルによつて吹き飛ばされたテラフオーマーの死骸、小吉が気になつたのはその手である。

手のひらにはぽつかりと孔が空いている。両手に、元から存在する器官として

それと同じものを小吉は知つていた……そしてそれが火星で失われたことも……

「奴ら……まさか死体を!!!」

その発見は、火星における死闘が想像を超えた激しいものになることを予感させた。

—火星の洞穴—

自然にできた空間

そこに広がるのは火星にはない——なかつたはずの赤い液体

そして機械の部品や昆虫の体の一部；ただし、昆虫に関するものの大きさはよく目にする昆虫のものより遙かに大きい：

そんな中、動くものがいる。

それは、石のナイフで何かの解剖に勤しむ一頭のテラフォーマーだった。

「じょうじじ」

切つては取り出し、切つては取り取り出し、時よりナイフを置いて単なる石で壁に何かを刻む。

そして手元に置かれた一枚の布を見る。まるで何かを確認するかのように……
布に描かれていたもの、それは――

人体の解剖図であつた。

害虫の技術革新、そして陰謀が静かに、見えないところから確実に戦士へと襲い掛け
ろうとしていた。

第10話 染まる色

幕を開けた火星における異種族による激突は、各地で勃発していた。

—丘に囲まれた大地—

小高い丘が広がる中に存在する平原、そこには本来僅かな緑があるだけで地球のよう
な木や花といったものは存在しない。

そんな殺風景な大地が今、飛沫と肉片によつて染め上げられていく……

「じょッ！」

「じょう！じょう！」

「じょう！じじ！じょう！」

「……」

「つあああああああ!!!! じょうじょうじょうじょう うるせえよ!!!!
 黙つて殴つて来いよ!!!! 野良犬のほうがまだ静かだわ!!!!」

第五班と交戦したテラフオーマーたちの体液が飛沫となり、肉片が宙を舞っていた。

「…………お前もうるさい、ルーク」

第五班の戦力であるレイが呆れつつ呟く。

普段の黒髪は赤く染まり、両腕となぜか背中にも黒い羽根を携えた姿の彼女はこの戦場においてよく目立つていた。

それを目印としているのか、テラフオーマーが集中して襲い掛かる。

「じょう!!!!」

「じじじ!!!」

二体のテラフオーマーが同時に彼女めがけて石の棍棒を振るう。

左右どちらにも、ましてや下がることもできないほどの距離、そして全力で放つ高速の攻撃。敵の排除をこの二体は確信した。

が、レイは先程と変わらず立っていた。しかも体には傷の一つもない。

その拳は、腕ごと切り離され宙を舞っていた。

「この程度なら問題ない……」

よく見れば彼女の右手にはこの状況を作り出したものが握られていた。
しかしそれは一見すると武器とは思えない代物だった。

繊維のようなものが一本、細い金属の部品で固定されたもの

例えるなら、握るためのグリップを追加した金属製のヴァイオリンの弓

それを彼女が再び振る。

すると甲皮に守られているはずのテラフオーマーの体が、まるで温められたバターかのように滑らかに切り落とされた。

「まあやるな、小鳥の割に」

「うるさい、偏食野郎……後ろツ！」

「おつと！」

レイに軽口を叩きながらもルークは近づくテラフオーマーを容易く切り裂いていた。彼の姿もまた変態前と大きく異なっていた。

髪は普段の倍ほどに伸び、白い縁取りのある黒い帯模様が現れていた。発達した腕や胸元の筋肉、そして太く短くなつた手の指。その先にはまるで鎌のように湾曲した鋭い爪が生えている。

……

「ルークのベースは知つていたけど……まさかあんなに強いなんて……」

「アリクイ……だよな？ 嘘だろ……」

高速脱出機から二人を見守つていた非戦闘員たちが呟く：

彼らはルークのベースは知つていた。知つていたからこそ恐怖を感じていた。

——オオアリクイ——

歯のない口と長い舌で一日に約3万匹を食べる、大人しい性格
ルークのベースとなつた動物であるが、ここまで聞けば弱い動物としか思わないであ

ろう。

では本当に弱いのか？

答えは　NO　である

アリやシロアリを食べるよう進化した彼らには、アリ塚を掘るための発達した筋肉と鋭い爪が備わっている。これが生物の肉体に振るわれた場合、只では済まない。

事実、オオアリクイによる人間の死亡事故が発生している。

最も彼らが爪を振るうのは自らの身を守る時である。

では彼らの持つ武器が人間大になつたら……：

そして彼ら以上に可動する人間の腕や手に発現したら……：

戦い慣れた者に組み込まれたとしたら……：

猛獸と呼べるほどに凶悪で、心強い存在に変わる

「本当にアタシらの出番なかつたな、班長」

……
戦闘員であるイザベラとこの第五班の班長であるアドルフも二人の先頭を見つめる。

「あの二人の実力なら問題はないと思っていた……それに

ああしないと、うるさくてしようがなかつたしな……」

「つへ！ どうだレイ！俺のほうが多く倒したぞ！」

「競争じゃないんだ、いちいち張り合つてくるな……オレのほうが多く倒したし……」

「あ!? あんな細つちい道具に頼つてるような奴がよく言うぜ!!!」

「何だと!!」

……

(((((そうですね))))))

心の中で皆、同じことを呟いていた。

脅威であるテラフォーマーとの初戦闘において圧倒的な勝利を収めた第五班の幸先是、実に良いと言えた。

最も、初戦闘を終えた二人が未だに子どもの喧嘩を繰り広げていることを除けばではあるが……

第11話 常闇より

不測の事態はつきものではある。

火星でゴキブリが異常な進化をしていく時点で人類の予想など予想を遙かに超えて
いる。

今更何が起きても

「お…おい、なんでこんな…」

何かが蠢いていたとしても

「どういうこと、だ？」

時は少し遡る…

—第三班（ロシア班）—

「到つ着——く!!」

ロシア班はとある場所に到着していた。

その場所には遙か昔より存在を噂され、近年バグズ2号の探査によつて確認されたものがそびえ立つてゐる……

「画像でも確認しましたが……うして見るまで信じられませんでしたよ」

一人がポツリと言葉を漏らす。無理もない、数百年前に計画された通りであれば……には苔と一種類の昆虫が生息しているだけであつた。

そんな星にあるはずがないのである。

ピラミッドが。

広がる大地にそびえ立つその人工物は、一見この世界に馴染んでいるようにさえ思える。しかしそれと同時に奇妙さも感じさせていた。

「テラフォーマーが一匹もいませんね……」

この場所にはピラミッドを守ろうとする者どころか付近で生活しているであろう個体さえ見当たらない。

「確かに妙だが、いなにこした事はない。そんじや始めるか　俺らの任務をな」

「じ」

一瞬吹いた風音の中からその声を聞きとれたのはごく少数の者が犠牲者だけだつた。

突如として数名の頭部が宙に舞う中、一匹のテラフオーマーが躍り出た。

テラフオーマーは勢いをそのままに自身の目の前にいたエレナに手を伸ばす。が、第三班の班長であるシルヴエスター・アシモフが咄嗟にかばつたことでアシモフの右腕を切り飛ばすに止まつた。

ここで隙を見逃すアシモフではなかつた。残つた左手でテラフオーマーの頬を掴むと、その勢いのまま後ろへと投げ飛ばした。

その間に三班各員が脱出機に備えられた 網 を手に取る。

網—対テラフオーマー発射式蟲捕り網—は理論上テラフオーマーの筋力の三倍でも千切つて脱出することなど不可能の代物であり、そしてもがけばもがくほど絡みつくようになつてゐる。まさに捕獲に特化した代物である。

「一匹だ！薬は節約!! 訓練通りにこの単体のアホを—
生け捕りにする!!!」

アシモフの指示でエレナが網を持ち、構えた。
テラフオーマーはエレナの方向へと向かう。

赤い一点の光がテラフオーマーの顔に照射される。

「 ターゲット 捕獲 」

網は何もとらえていなかつた。網を構えていたはずの彼女は地面に倒れ、通り過ぎた
テラフオーマーの手には何かがあつた。

「お…おい、なんでこんな…」

背中に穴の開いたテラフオーマーは興味なさげに手のものを地面に落とした。

「どういうこと、だ？」

それは、人間の左腕であつた。

「どういうつもりだ、ニコライ」

アシモフの視線の先、エレナが立つていた位置にいる左腕のない男は落ち着いた表情で班長である彼に謝罪をする。

「班長の指示を無視してしまい申し訳ございません。咄嗟のことです…」

「ふん……まあ、エレナが助かつたのは事実だ。それに今から変身薬を使うことに変わりなさそうだしな」

第三班の周囲はどこから湧いたのか、二十ほどの個体に囲まれていた。

「ニコライ、腕生やしておけ…… 全員、薬を使え!!! こつからはサインAだ!!」
各員が薬を素早く使うと、向かってくる害虫を迎え撃ちはじめた。

「さて、君の相手は僕になりそうですね……」

失っていた左腕を完全に再生させたニコライは、先ほどのテラフオーマーを見据える。

「急な加速、その背中……バグズ2号の誰かの能力を奪つた個体でしようね……テラフオーマーの知能も恐ろしい……腕力も人間を遥かに超える……こんな石ころじや傷一つつかない」

次の瞬間、何も持つていなかつたはずの彼の手から小石が放たれる。飛んでくる小石はテラフオーマーの体に当たるが傷一つつかず、動きも特にしなかつた。

「さて、どうしましようか……では、自分の腕でしたらどうでしようか?」

するとテラフオーマーの右腕が突如として動き出した。腕を止めようとするとその個体の体は思うように動かない。

「詰んでたんですよ 君が僕の腕を持つて行つた時点で」

地面に落ちている腕、よく見ると細長い糸のようなものがその指一本につき一つ出ておりテラフオーマーの手足に絡みついていた。

そしてそれと同じものが男の右手指先それから目の前にいる害虫の右腕へと続

いている。

「まだまだ相手しないといけないのがいるのでこれで終わりにしましよう」

男が指を動かす。瞬間、テラフォーマーの腕は勢いよく胸へと振り下ろされ白い体液が飛び散った。

イカ

世界中に存在し数多くの種が存在する彼ら

その中でもこの種は謎に満ち溢れている

巨大なヒレや大きな目の特徴もさることながら最も目を引くのはその腕である

短くもイカらしい腕、その先からは細く長い腕が伸びている

胴体が50センチほどであるのに対し全長が7メートルを超えるほどであると言え

ばいかにその腕が長いかわかるであろう

そして腕の使い道どころか詳しい生態自体、27世紀に入つてもなお深い海によつて
包み隠されている

常闇の人形師 ミズヒキイカ

しかし、その神秘の能力だけでは強いとは言えなかつた。巧みに操り相手に察しさせ
ない技術があつてこそ真価を發揮する。

ロシアで右に出るものなしと言われた手品師 ニコライ・ポレヴォイの経験と実力によって未知なる力との合作は完成の領域に達していた。

「不測の事態はつきもの、火星でゴキブリが異常な進化をしている時点で人類の予想など予想を遥かに超えている。

今更何が起きてても、何かが蠢いていたとしても、我々は負けません

そうでしょう、B O S S?」

瞳に映る女は害虫を打ち倒しながら、
にこりと笑う

登場人物話 屠り復讐を誓う

少女が生まれたのは北の大地、寒く小さな街だつた

元軍人の父と主婦の母のもとに生まれたが、優しく伸びやかに育てられ、大人しい性格で争いとは無縁の日々を送つていた……

「はやくはやく！出し物大会終わっちゃうよ！！」

「まつてよレイラ…そんなに早く走れないよ…」

その日、広場で小さなマジックショーが行われると聞き少女とその友人は広場までの道を急いでいた。

週末でぎわう街 いつもと変わらない穏やかな日

そのはづだつた

『全部隊、突入』

街に響き渡つた一声を皮切りに軍用車や武装した改造車が街になだれ込んできたの

だ。

「今にな

軋む音、悲鳴、混乱、散らばる物、止まらぬ赤染の車の隊列
 ぐしゃり そんな音を最後に友人であつたその子どもは姿を消した。少女の視界に
 広がるのは一面の赤と鉄の怪物たちだけだつた。
 その瞬間彼女の耳から音が消えた

『薙ぎ払え』

その無常の言葉も

雷鳴のように響き渡る銃声も
 人の呻き、嘆き、嘲笑、絶叫も
 何も少女の耳には届かなかつた

少女は目の前の理不尽に突つ立てることしかできなかつた

『この地は我々が支配する』

街の人間の多くが命を落とす中、彼女は偶然にも救い出された。

父を含む街の外へと追い出された人々の中に彼女はいた。

しかしこの時の彼女には、生きていたことを喜ぶ気持ちも友を失つた悲しみも、これからの未来への不安もなかつた。

「パパ、戦い方を 教えてください」

少女に灯つたのは激しい憎悪

この日を境に少女は守られるだけのちっぽけな存在であることを辞めた

「政府も軍も……グルだ 俺たちの声は握りつぶされた」

この事態を開拓するために様々な場所に助けを求めた

しかしその声は届かず打ち消された

反吐が出るほどに腐敗した上の人間、組織に最早希望など抱けない

もう、方法はこれしかなかつた

「我々は故郷を取り戻すため、あのならず者共と戦う」

元軍人である少女の父が頭領となり、戦略や物資調達を指揮し、奪われた者たちは一丸となり協力し力を蓄えた。

訓練を繰り返し、街を取り戻せるほどの力を着実に付けた。

少女は成長し大人へはそう遠くない歳となっていた。しかし彼女の心に灯つたものは変わらず消えず心にあり続けた。力も父と負けず劣らないほどになっていた。

皆、今までの努力と勝ち取るという強い意志を胸に抱き、準備は万全なものになつていた。

そして火蓋は切つて落とされた。

奇襲によつて混乱するならず者、作戦と培つた力によつて反逆者たちは着実に制圧していつた。

あともう少し、あともう少し 焦る気持ちを抑えながら彼らは確実に役割を全うしていく。

もう手の届くところに勝利がある。誰もがそう信じた。

彼らは誰も知らなかつた。人間を異形にする力が存在することを一人の力で簡単に戦況がひっくり返ることを今までの積み重ねを無に帰すことなど悪魔にとつて造作もないことを

生物の力に覆われた怪人たちによつて多くの血が流れ、勝利を掴みかけた手は惨たらしく踏みにじられた。

流れた血の中には彼もいた……

「パパ……」

頭領を討たれないように、希望だけは繋げるためにと多くの人々によつて彼は戦場から押し出された。しかし実際にできたことは頭領が瀕死であることをならず者共に知らせないようにすることだけであつた。

「メリ亞……すまない、お前に皆に…普通の幸せを渡すことができなかつた……」

「もう喋らないで…傷が開くから」

「メリア……もう戦わないでくれ……もう……ここから出て残つた者たちと幸せを掴ん

でくれ……これが……お前を戦いの道に引きずり込んだ酷い・父の……最後の願いだ
……」

「パパ!?

「しゃわ……せに……」

「私はパパを裏切る……幸せは街を奪い取つてから皆と分かち合う……皆、これ以上の苦痛に立ち向かう覚悟はある?」

その光景を見届けた者たちは一言も発することはなかつた。静かにうなづくだけ。

「私たちは奪い取る 力も故郷も、そして幸せを どんな手を使つても」

この日を境に彼女が頭領となつた。

彼女がB O S Sとなつてから数週間した頃、運命が訪れた。

「B O S S、正氣ですか!? そんな訳のわからない人体実験に参加するなんて……」

「ああ、やる この実験で得られるもの…それこそアイツらが使つていた変身能力だ…」

彼女たちが見つめるパソコンの画面、そこに表示されているのはとある研究所からの

人体実験の被験者募集の内容だった。

勿論、裏世界の情報を探る中で見つけ出したものだ。記載されている成功率なんてあってにならないはずだ。そもそも行つたところでどんな目に合うかもわからない。

しかしこの内容を、彼女を含めこの場にいるものは無視できなかつた。

成功事例の画像、その姿は自分たちを地獄に追いやる反撃の手を踏みにじつたあの生物の姿そのものであつたから

「ここで手術を受けければ、アイツらと同じ力が手に入る……そうすれば今度こそ奪い取れる 私はここに行く」

「やめてください！ それならわたしが！ ここでBOSSを失つたら…」

『その通りだ こんなヤブ医者以下の連中に身を任せることはしないでほしい』

画面越しに突如現れた男に、周囲は一気に緊張状態に入る。

「お前は何者だ？ いつたい何が目的だ？」

『失礼した。私はとある世界規模の研究に関わっている研究者だ。 今回は取引のための中継を繋がせてもらつた……私と取引をしてもらえないか？ メリア・ザハロフ？』

』

彼女自身の名前を簡単に告げられた事実に、内心驚愕しつつ彼女はそれを顔に出さず警戒を続ける。

『君たちに関わる情報のほとんどは把握済みだ。君たちの境遇についても、君たちが敵とみなしている連中の正体もだ……』

『話が逸れたな……今回取引したいのは君だ、メリア・ザハロフ。君の持つ素質、それは我々の研究に必要なものだ。我々はぜひ君には研究に参加してもらいたい……もちろん報酬は出す。我々ができる範囲であれば君が望むことを叶えよう』

『無茶苦茶な話だな……それほどの価値が私にあると?』

『ある』

彼女の問いに男は一拍置かず答えた。

『我々は人類の存亡を賭けた戦いを前に準備を進めている。そのためには世界各国から我々の求める素質を持った人物を集めている。世界を救つてもらえるのであれば金に糸目を付けるつもりはない。君はそれだけの存在だ』

『……質問だ。私は具体的に何をすればいい?』

『詳しい話はまた別の機会になるが……簡単に説明すると、君は人間以外の生物の力を埋め込み、火星で戦闘を繰り広げてもらう

「他に質問は？」

「手術の成功率は？」

『本来は36%だが君の場合、私が執刀するから90%以上だ』

「…随分な自信だな」

『それだけの腕がなければ今回の研究と計画ができなかつた。それだけのことだ』
画面の男は鼻にかけるわけでもなく、淡々と語つた。

「…」

『信用できないのは当然だ。ではこうしよう、明日物資を君たちのいる基地に届けよう。私も現地に行き、さらに詳しい話をする。そこで信用できないならそれでも良し、信用してもらえるのならぜひ研究に参加してほしい』

「…わかった それでいい」

『では明日』

翌日、本当に物資とともに男は現れた。

「2週間分の食料だ。少しは信用してもらえるだろうか…」

男は淡々と話を進める。そして彼女に問う

「さあ、メリア・ザハロフ 君は何を望む」

「……私はどうなつてもいい。その代わり武力提供をしてほしい。あの忌々しいならず者共を一人残らず葬れるほどの武力を……」

「武力提供は構わないがそれは君が任務を終えて地球に戻つてからだ」「なぜ!?

「任務で得られるものが重要であるからだ。それに君がBOSSである以上、君が指揮しなくてどうする?」

「……」

「君が戻るまで物資の支援とこの護衛は行える。それで手を打つてはくれないか?」

「わかつた… それでいい」

「それでは近々迎えを寄越す 協力感謝する」

（私は必ず戻る 皆のために）
そして彼女は踏み出した。復讐と勝利を願い、新たな戦地へと

メリア・ザハロフ 参戦

『彼女は協力すると
ああ、君の言う通りだつた：

しかしよく私の情報を探し当てたな……執念か？それとも同郷の友を救うためか？まあ私が聞いたところで何もしないさ

それで君はどうするつもりだ
北国一の魔術師の君は?』